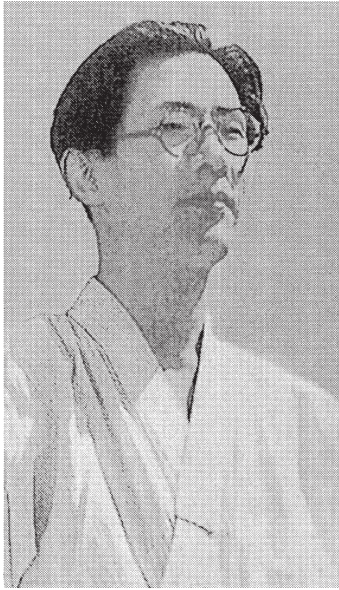


現代俳句の巨星 人間探求派の俳人 石田 波郷

元松山市考古館長
伊予史談会会員
大野 慶一

一、波郷の生い立ち

石田波郷は、大正二年(一九一三)、西垣生村の小農の二男として生まれる。父は石田惣五郎、母はユウという。波郷の本名は哲大(てつお)と云った。小さい時から大変無口であり。おとなしい、だれがみても変わった子であった。大きくなったら何になりたいかと言聞かれると、「天皇になりたい」と答えたという。生まれてすぐ、石油ランプの事故で大火傷を負い、終生腹部に傷痕があった。やがて長じて垣生尋常小学校を卒業し、県立の松山中学校へ入学した。成績もよく、副級長をつとめたほどだった。中学四年の時、級友の中富正三



石田 波郷

「石崖の上の小家も麦の秋」
波郷は小学校の成績も優秀であったが、上級の学校

(大友柳太郎)の勧めで俳句に興味をもち、句作にふけた。当時の雅号は、山眠と称したという。たまたま郷里の垣生村の石田家の近くに、子規門下の村上霽月が住んでおり、そんなことから波郷は小学生ころから俳句に親しみを持っていた。しかし、これは遊び半分、本格的に句作に取り組んだのは旧制の松山中学校に入ってからであった。中学五年生の時、同級生と語らつて「木耳会」を作り、(きみみ)と号す。やがて、村上の今出吟社に出入りし「小蓼会誌」を発行して「二良」と名乗る。松山中学校を卒業してからは、波郷の家は決して豊かな農家ではなく、自作田の面積も少なく、家の手伝いをするのと同時に、近所の五十崎古郷に師事して波郷の号を与えられ「馬酔木」に一句入選する。



波郷の生家(西垣生)。建て直される前の生家



昭和8年8月、新川海水浴場で。(左)五十崎古郷、(右)石田波郷

へも進学できず、友人の父親の助力で中学校へ進学できた程であった。中学時代も目立つ学生ではなかったが、俳句だけは熱中した。昭和五年、中学校を卒業。家庭の経済状態から上の学校へは行けず、バス会社に就職が内定したが、彼のプライドと自負がそ

二、俳句三昧の波郷

れを許さず、蹴った。当時、松山の俳壇には郷土出身の高浜虚子が主宰する「ホトトギス」派が多く、波郷は今出吟社の「洪柿派」に入った。当時、松山中学の教師にも「洪柿」会員が多かったせいであろう。「洪柿」は、宇和島の松根東洋城が主宰する俳誌で、人間修業を唱え、写生を旨とする「ホトトギス」とは趣を異にしていた。しかし、波郷は、兄を手伝って農業をし、図書館に通って句作に励みながら、しだいに「ホトトギス」の作風に惹かれていった。

やがて、余戸村に住む俳人の五十崎古郷に師事したが、古郷も松山高校に在学中、脊椎カリエスにかり、病弱の身で「ホトトギス」の有力同人である水原秋桜子の指導を受けていた。古郷も波郷の才能を認め、波郷もまた古郷の手柄に強く惹かれた。波郷というペンネームも古郷が名付けたものであった。従って、波郷は古郷の指導を受けて「馬酔木」に投句し、入選するようになった。後に、水原秋桜子は「ホトトギス」を脱退して独立したので、古郷も波郷も「ホトトギス」とは無縁に終わる。昭和七年、「馬酔木」の巻頭に、「自然と真と文芸上の真」を発表する。これを機会に、古郷は波郷に上京を奨め、秋桜子に指導を託す。時に波郷二十歳。しかし、俳



昭和47年、垣生小学校の句碑。「秋いくとせ石鎚を見ず母を見ず」

句で身を立てることは簡単ではない。秋桜子は医者であったが、若い波郷は生来器用な性格ではないから、何度か職を変える。

秋桜子から学資を出してもらい、明治大学文芸科に入る。二十三歳で「馬酔木」の同人となり、その生活は俳句三昧であった。次第に、彼の句作にも変化が出て、秋桜子の期待も大きくなり、編集にも加わるようになった。

「雀らの乗ってはぐれり芋嵐」「プラタナス夜もみどりなる夏は来ぬ」二十歳の時、徴兵検査で帰郷し、第二国民兵となる。昭和十四年、句集「鶴の眼」を刊行し、「馬酔木」の加藤秋邨、「ホトトギス」の中村草田男とともに、人間探求派と呼ばれるようになった。

「バスを待ち大路的春をうたがはず」「霧吹けり朝のミルクを飲みむせぶ」この頃の彼らに共通していたのは、生きるということ。つまりは、人生というものを句作に反映させるといふ姿勢があつて、人生派とか苦悶派と呼ばれた。

この時分の波郷の文章には、「俳句は文学ではない。なまの生活である。俳句を作るといふこと

は生きるといふことである」と書いている。波郷にとつて句作は、実人生そのものであり、虚構のもてあそびではないということであつた。

三、俳句弾圧と召集

五十崎古郷との出会いが俳句にのめり込むはじめで、古郷は俳句の師であるとともに秋桜子を紹介した人生の師でもあつたが、惜しくも四十歳で亡くなる。

その後、横光利一氏に会い、「石田波郷集」を出版したのが、二十二歳だつた。

「描きて赤き夏の巴里をかなしめる」二十三歳にて明治大学を中退し、市井放浪の時代が始まる。「鶴」といふ俳誌の句選を友人に押し付け、女性関係の事件、さらに酒に酔いつぶれ、後に、この時期の心境を「青春の自負と不安」と書き残している。



五十崎朗氏宅。五十崎古郷と石田波郷の句碑。「寝待月灯の色に似て出でにけり」(右)古郷。「寒椿つひに一日のふところ手」(左)波郷

自筆の句軸「芋好きの吾に芋好きの妻子あり」



「雪嶺よ女ひらりと船に乗る」「吹きおこる秋風鶴をあゆましむ」「女来と帯纏ぎ出づる百日紅」

戦時下にて俳句弾圧が始まり、波郷と秋邨はブラックリストにのる。

「椎若葉わが大足をかなしむ日」昭和十六年、太平洋戦争が始まり、ひとり俳句固有の方法を元禄俳句に探る。

「濡縁に母念ふ日ぞ今年竹」

二十九歳で「馬酔木」同人を辞し、見合いで吉田安燿子と結婚。

やがて、昭和十八年、長男修大(のおお)を出生して応召。佐倉連隊に入り、華北へ渡り、山東省臨巴に駐留する。

「雁や残るものみな美しき」

三十一歳で、左湿性胸膜炎を発病。入院し、内地へ送還、兵役免除、終戦。妻と長男は疎開して助かる。



四、現代俳句の時代

敗戦後、「現代俳句」を創刊したが、昭和二十五年に肺結核再発。この頃、四年ぶりに水原秋桜子と再開し、句作にさらなる磨きをかけた。大病という悲惨な体験、苛烈な手術、入院の繰り返しのなかで、命が失われようとした時も、波郷は平凡な草木を愛し続けた。昭和二十五年に刊行された「惜命」という句集は、彼の最高傑作だと評価されている。

「百方の焼いて年逝く小名木川」「桔梗や男も汚れてはならず」波郷の句に風格が備わり、戦後の暮らしは落ち着きを取り戻す。しかし、闘病は続く。

波郷の句には、母を詠んだものが多い。離れて暮らす期間が長いのに、終生母の面影を胸に抱く。昭和二十九年、「石田波郷全句集」が刊行され、読売文学賞を受賞。俳壇で彼の占める位置はゆるぎないものになった。

昭和四十四年、五十六歳で永眠する。その年、句集「酒中花」が芸術選奨文部大臣賞に輝いた。

【参考文献】

- 一 垣生資料『石田波郷と作品』楠本憲吉著 原暢夫編
- 二 松山百点会『石田波郷』
- 三 『小説石田波郷』土方鉄著
- 四 『愛媛県史(人物編)』愛媛県